【60】

氏　名（本　籍）	高木和子（東京都）
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第113号
学位授与年月日	昭和58年1月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	幼児の物語理解における継時的情報処理能力の役割

主　査	筑波大学教授	教育学博士	福沢周亮
副　査	筑波大学教授	教育学博士	高野清純
副　査	筑波大学助教授	教育学博士	太田信夫
副　査	筑波大学教授	教育学博士	岡田明
副　査	筑波大学教授	教育学博士	松浦義行
副　査	筑波大学助教授		能田伸彦

論　文　の　要　旨

(1) 論文の構成

本論文は本文全4章，539頁ならびに文献・資料から構成されている。

(2) 研究の目的

本研究は，幼児の言語行動の発達と認知発達との関連の把握を大きな枠組として計画された。とくに言語行動の発達の一つとして物語の理解の発達を取りあげ，これに関連する認知発達の側面として継時的情報処理にかかわる認知的機能を取りあげて，前者における後者の役割の検討を目的としている。

(3) 研究の方法とその結果

全体は大きく2部に分けられ，前半（実験1～5）で継時的情報処理能力（TOPT（Temporal Order Perception Test）による成績）の意味が検討され，後半（実験6～11）で物語理解における継時的情報処理能力の役割が検討されている。

実験1：　TOPT日本版の作成とその妥当性の検討（実験1の1：TOPT日本版の内容的妥当性の検討，実験1の2：TOPT成績の発達的変化の検討）

4～6歳児を対象にBakker (1973) のTOPTの日本版が作成され，内容的妥当性が検討され

た結果，このテストによる継時的情報処理能力の測定の妥当性が示された。また，5歳後半期において継時的情報処理能力の発達が，何らかの質的転換により急速に進むことが示唆された。

実験2：　4歳児における知的課題達成の因子分析

TOPT成績が大きな伸びを示す5歳後半期の直前という意味で4歳児を対象にして，表記の主題が検討された結果，この時期の幼児の認知的操作には同時的なものと継時的なものとがあり，TOPTは継時的情報の流れにそった操作にかかわるものであることが明らかにされた。

実験3：　言語教示理解のイメージ化訓練効果とTOPT成績との関連

言語教示の内容をリファレントの動きとしてイメージ化することにより解決できるような課題の遂行とTOPT成績との関連が検討された結果，TOPTの達成には，継時的流れをもった情報を一つのまとまったものとして構成していくのに必要な認知的機能がかかわっていることが示唆された。

実験4：　移動および回収教示理解成績とTOPT成績との関連

いくつかの事象の継時的生起をどの範囲まで処理できるかという量的側面とTOPT成績との関連に焦点が合わされた結果，TOPTの達成に関連するものは，量ではなく，順序に従った処理をするための認知的機能であると推定された。

実験5：　意味的統合化課題達成とTOPT成績との関連

全体として意味をもつ材料の構成や理解とTOPT成績との関連が検討されたが，全体的には関連はみられなかった。しかし，全体として意味理解が不十分でも，TOPT成績のよいものは始めと終りの関係はとらえており，話もそれなりにまとまったものを作っていることが明らかにされた。

実験6：　物語受容時の集中度を指標とした理解度とTOPT成績との関連

理解の測度として物語の受容時における集中度が取りあげられ，直後再生や絵カードの再構成での理解度との関連と共にTOPT成績との関連が検討された結果，絵本の読みきかせ群，TV視聴群共に，物語受容時の集中度の高いものは理解テストでの成績がすぐれており，TOPT成績もよいことが示された。

実験7：　構造性の異なる物語の理解におけるTOPT成績の役割

理解度の指標として手がかり再生と絵カードの再構成得点が用いられて，表記の主題が検討された結果，絵カード再構成方法の成績とTOPT成績との関連はどの物語においても大きかったが，手がかり再生テストの，とくに言語能力レベルを統制した際の成績では，物語により違いが示された。とくに物語の構造との関連については次のようでかった。繰り返しのある物語の理解成績ではTOPT成績との関連が大きい。繰り返しがなくても複雑な構成の物語では，TOPT成績のよいものの理解がすぐれている。

実験8：　物語理解における先行絵画情報の役割

幼児にとって理解の促進をもたらす先行情報とはどのような性質をもつものかを検討するため表記の主題が設定された。先行情報には，単一事象によるものと加算的構成のものが用いら

れた結果，加算情報の順序提示群が他の条件群よりも理解得点が高く，理解を促進する先行情報は，後続の物語の構成を推定しやすいものであることが明らかにされた。

実験 9 ： 物語理解におけるFrame情報およびSetting情報の効果

先行情報に含まれているFrame情報とSetting情報を取りあげて，表記の主題を検討した結果，Frame情報はSetting情報があってはじめて全体理解のために有効であることが明らかにされた。

実験 10： 物語理解におけるFrame情報の利用とTOPT成績との関連

Setting情報をもつ状態でのFrame情報の利用による理解とTOPT成績との関連が検討された結果，実験 9 の結果とは異なり，Frame情報の提示による理解の促進はFrame情報の示す内容に対応した部分でのみみられた。しかし，Frame情報による理解成績の上昇は，TOPT成績の高い群において顕著で，Frame情報の利用にはTOPT成績にかかわる認知的機能が大きな役割を果していることが示唆された。

実験 11： 繰り返しのある物語の理解における前提情報の利用とTOPT成績との関連

幼児にとって親しみのある繰り返し構造をもつ物語が用いられて，表記の主題が検討された結果，TOPT成績のよいものは，前提情報（先行情報の一つ）が与えられると，物語の全体構成の理解がすすむことが明らかにされた。

審　査　の　要　旨

本論文は，言語発達と認知発達との関連の問題に焦点を合わせ，それを物語理解とTOPT成績との関係という形で具体化したものであるが，TOPT成績についての群細な分析と共に，両者の関連について多面的な分析を行って積極的な結果を得たことは，高く評価できる。また，主題の新しさと共に研究の手法に工夫がみられることは，それらの点での，この領域への貢献として評価できることである。

ただ，一方では，概念規定にあいまいさがあるとか結果の解釈にやや無理があるとかの問題とすべき点も認められる。

しかし，実証的に把握しにくい主題を取りあげて，上記の結果を得たことは，この領域に新しい知見をもたらしたといえるのであって，大きな意義が認められる。

よって，著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。